

[論文]

sola scriptura (聖書のみ) の現代的意義

カルヴァンから学ぶ聖書解釈の原理とその重要性¹

野村 信

[序]

現在、世界のキリスト教会は、様々な仕方で連帯し、神学的な歩み寄りを進め、教派間の神学や伝統を乗り越えて合同しようという動きがある。幾つかの主題の下に教派間の対立を越えて共同の声明を発表したり、合同集会を企画したり、また実際に教会合同を実現した教会の群れもある。ただ問題は、教勢が衰えて止む無く統合するような方向や、神学的な見解の相違には触れず安易に教会合同を目指すことは避けたい。なぜなら、教会の衰退による合同や性急な統合は、後に禍根や内部分裂の火種を残すことになり、持続可能な合同とならないからである。

しかし一方で、教会のゲッター化（閉鎖集団の意）は避けたい。それは教派間の対立による孤立を意味するだけではなく、社会からの孤立という問題をも含む。「教会の頭なるキリスト」（エフェ5：23，コロ1：18）²という表現は、イエス・キリストが諸教会を越えて上にあり、かつ「キリストの体なる教会」（エフェ1：23，コロ1：24）は、教会の中心にキリストがいることを意味する。教会のゲッター化は、性格上閉鎖的な傾向をもつことから、その頑なな姿勢が結果として社会に対しても門を閉ざすことになる。

プロテスタント教会の存立の原理は何かを問わねばならない。プロテスタント諸教会には多くの教派があり、自らの立場を主張するが、プロテスタント教会がローマ・カトリック教会とも正教会とも立場が異なる点を明確にする必要がある。なぜならプロテスタント

¹ 本稿は、2017年12月11日（月）に日本基督教団大森めぐみ教会で開催された日本改革長老教会協議会教会にて発表した講演をもとに修正・加筆した。なお本稿の脚注では、カルヴァン研究の領域では周知となっている見解や情報についての出典は記さなかった。

² 「エフェ」は、「エフェソの信徒への手紙」の略語であり、「コロ」は「コロサイの信徒への手紙」の略語である。本文の聖書の各書の略語は、『聖書新共同訳』（日本聖書協会）の目次にある略語に従っている。

教会の出発点を確認すること、その原則を探求することは、他のキリスト教の群れとの違いを明確にすると同時に、どのように他の諸教会と連帯するかという見通しも得ることができる。そこで、プロテスタント、すなわち福音主義の立場に立つ教会の原点を問う。すると、マルティン・ルター以来、「*sola scriptura* 聖書のみ」、「*sola fide* 信仰のみ」、「*sola gratia* 恵みのみ」と言われる三大原則が登場する。

本稿は、この三つの原則の中でも、*sola scriptura* に的を絞り、これについて論じ、*sola scriptura* は、マルティン・ルターによって主張されたが、その後のジャン・カルヴァンにおいてその扱いが確立したという見解の上に立つ。しかし問題は、カルヴァンを継承して今日に至るカルヴィニズムとその流れに立って教会を形成する改革派教会は、時代的要請もあって、聖書の扱いに関しては、カルヴァンのように聖書を扱えなかったのではないかと考える。本稿が問題とするもう一つの点である。

最初に、カルヴァン神学を扱う上で留意すべき次の2点を喚起しておきたい。

1, カルヴァンの神学についての研究は、『キリスト教綱要』に凝縮されており、『綱要』をよく読めばカルヴァンが分かると考えている人々が多いが³、それは今日偏った姿勢であることが指摘されている。『キリスト教綱要』の執筆に費やす時間と労力は、他の彼の神学的な活動に較べれば僅かであった。

2, カルヴァンの『キリスト教綱要』を手掛かりとし、さらに彼の神学諸論文も含め、いわゆる彼の「教理（ドクトリン）」に研究が集中するが、この「教理」の各項目を研究することによって、カルヴァンの神学の特長を定めることには限界がある。特に、カルヴァンの『聖書注解書』や、「説教」を軽視したり、無視することはカルヴァンの聖書理解の全体像を把握できない。また、カルヴァンの特定の「神学教理」を軸にして、『聖書注解書』や説教を「神学教理」や「神学用語」によって解説しようとする企ては、カルヴァンを傷つけることを意味する。それは、聖書本文を「教理」で輪切りにして読むという仕方の問題があるのと似ている。筆者がカルヴァンから学んだことは、聖書は、いわば「宝」⁴のようなもので、一語一句、一文一節、無尽蔵の神の恵みが秘められた器であり、カルヴァン研究者はカルヴァンのように、聖書から豊かなメッセージをくみ上げることが求められているのである。

³ 例えば、浩瀚な赤木善光著『宗教改革者の聖餐論』（教文館、2005年）の中で、一度もカルヴァンの『聖書注解書』や「説教」からの引用がないが、本人の弁によれば、「あまり重きを置く必要がない」であった。

⁴ カルヴァンが聖書を「宝」として言及している箇所は、『綱要』フランス語版「本書の梗概」など。「我々の主は、聖書の中にいわば御自身の無尽蔵の宝を繰り広げようとされたのである」（私訳）。

〔I〕 すべてのキリスト教活動の土台としての聖書

1. カルヴァンにおける「*sola scriptura* 聖書のみ」を論じる時の留意点

(1) 「聖書のみ」を強調すると、仮に「逐語靈感主義」は避けられても、また「聖書根本主義」には陥らないとしても、「聖書些末主義」とでも言わんばかりの、「聖書に固執し、古代の、小さな世界に押し込められて窮屈である」と語る研究者や牧師たちがいるが、カルヴァンの聖書の取り組みとは無縁である。その人々は、少なくともカルヴァンのように聖書を扱っていない。本稿ではその点を意識している。

(2) カルヴァンは、聖書を、逐一順を追って、一語一句を丁寧に解釈し『聖書注解書』を執筆し、連続的に説き明かす「説教」をした、という話をすると、それを聞いた研究者や牧師の中には、「さぞかし厳格で、堅苦しい説教をするのだらう」と言う人々がいる。しかも「その説教を聞くためにそこに集う会衆は毎回忍耐を要求されて、不幸で、かわいそうだ」と思うようだ。なるほど、そういう説教者も教会も少なくないが、しかし、カルヴァンに関しては、後述するがいずれも全くあてはまらない。

(3) 本稿で論じようとしている聖書の取り扱いは、後述するが大きく二種類に分けられる。その一つである聖書解釈についての領域は、注解をしたり、説教をするという作業を指すが、その作業は、当該聖書箇所から印象的な、あるいは主要なメッセージを見つけて、それを論じるという仕方ではない。たとえば説教で言えば、いわゆる「主題説教」と言われるテーマを絞って説教する仕方があり、その手法で聖書を執筆順に従って説教すると、「主題的講解説教」となるが、カルヴァンの場合にはあてはまらない。すなわち、当該箇所から何か主要なテーマを見つけて、それを展開するという仕方をとらない。これは後述する。

(4) 「聖書」を、それが執筆された状況や、特殊な性格を考慮しないで（あるいは無視して）、現代の書物と同じように扱う人々がいるが、それは聖書についての基本的な性格をあまりにも欠落させている。聖書は現代の文章や書物と同じように扱ってはならない。さらに聖書は、原文で読まなければならない。翻訳は原意を9割程度しか訳し出せないし、翻訳者の置かれている時代と彼の主観に左右される。もちろん注解したり、説教したりすることにおいて日本語訳聖書を用いることは当然であるにしても、ヘブライ語、ギリシア語の原文で読むという姿勢を貫く必要がある。

(5) 「聖書」が執筆された時代において、書物は、1) パピルスや羊皮紙の「巻物」に書かれた。すなわち、聖書はどの巻も初めから読まなければならないという性質のものだっ

た。2) 聖書は、最初に執筆された時には、各巻の題名、章、節は付けられておらず、段落ごとの小見出しも当然なかった。書物を書く上でそういう習慣がなかった。旧約聖書のかんりの書物は、最初の文字を題名として用いた。各巻の題名が付けられるようになったのは、時期を確定するのは難しいが、ウルガタのラテン語訳聖書にはつけられたらしい。さらに13世紀初頭に章がつけられ、16世紀(1551年)から一斉に節が付けられるようになり、KJVが小見出しを17世紀に採用して、日本でも新共同訳聖書から小見出しを採用している。このような区分やタイトル付けは、聖書を読みやすくした分だけ、豊かで多様な意味を落とした可能性がある。誤った分割から生じる問題も考えられる。(『新改訳聖書』の翻訳は参考になるが、一節ずつ文頭をそろえ、見た目には一見わかり易く見える。しかしこのようなレイアウトは採用しないほうがよい。) すなわち、カルヴァンの聖書理解においては、初期の聖書を意識して聖書を読むことが大切にされており、この点は世界のカルヴァン学者たちが誰一人指摘していないのは驚きである。その理由を一言すれば、現代のカルヴァン学者たちが彼の教理を研究することに集中し、聖書学、特に聖書の言語に精通していないからである。

2, カルヴァンの「神学の方法」

1 基本的な視座

(1) カルヴァンの時代には、神学的な活動(礼拝、伝道、牧会、教育、執筆等)を行う上で、現代のように神学の領域が三つの分野、すなわち「聖書神学」、「組織神学」、「実践神学」等に分けるという発想が無く、一人で三つの分野を担うことが当然のことであった。神学はそもそも豊かで総合的なものであり、神学研究をする者たちが、それぞれの専門分野に分かれて研究を行うという発想がなかった。神学をこのように分割したのは、主にシユラエルマハー以後の、近代になってからである。よって、カルヴァンは、毎日の礼拝説教と神学文章の執筆に加えて、家庭訪問や病人を見舞い、学校で教え、福祉的な活動にまで貢献するというキリスト教の活動全般を行っている。すなわち、この時代の人々は、ルターも同様であるが、良い意味で、一人で神学の様々な活動領域のほぼすべてを行った。

(2) カルヴァン研究から判明することは、カルヴァンは自らの務めとして、いわゆる神学の三つの領域、「聖書神学」、「組織神学」、「実践神学」をまんべんなく行った。しかも意図的に、明確な原則をもって、一貫してこの領域を実践した。最初に触れておきたいのは、本稿においては、第一の領域、すなわち ① 聖書の繙読 (*lectio=canon*) を「聖

書講解」と表記し、第二の領域、② 聖書の教理 (*doctrina=credo*) を「神学教理」⁵とし、第三の領域、③ 聖書の教えの実践 (*edificatio=ordo*) を「教会の建徳」と定義したい。カルヴァンは、生涯「聖書」を土台にして、この三つの神学的な領域の活動全般を行ったことになる。以下、紙面の都合上、この①「聖書講解」と②「神学教理」に的を絞って論じる。

まず、①「聖書講解 (*lectio=canon*)」について触れておこう。カルヴァンは、ジュネーヴに着任した時、求められた最初の仕事は、聖書講義であった。それは生涯続き、死ぬ数か月前まで、釈義や説教する作業を継続した。つまり、生涯、ほぼ毎日聖書を説き明かす作業を行った。原則的には、教会で説教をしたが、講堂で学生に向けて聖書講義も行った。説教に関しては、口述筆記され、すぐに何部も写筆され、販売された。その売り上げは「フランス人の基金」に収められた。聖書講義は、『聖書注解』として出版された。説教も聖書講義も、両者共に、聖書の一書を、最初の節から始めて最後の節まで、一語一句、飛ばさず、しかもどこか一か所に拘ることもなく、一貫して一定の長さで説き明かすという手法を採った。

(3) ②「神学教理 (*doctrina=credo*)」に関しては、1536年にバーゼルで最初の版となる『キリスト教綱要』を出版した。これは使徒信条を軸にして執筆した教理書であった。翌年ジュネーヴに着任して、しばらくすると『ジュネーヴ教会信仰問答』や『信仰の手引き』を出版した。1541年には再び滞在先のバーゼルで、『キリスト教綱要』の第2版を出版した。これは、初版の1536年版を増補したものであるが、1541年の第2版から、ローマ書の構造を用いて増補、改定した。それ以後は、自ら考慮してふさわしい位置に、神学の項目を配置していった。その大切な点の一つに、「予定論」の位置がある。最終版1559年においては、予定論の位置は以前の版に比べて後方の、聖霊論(信仰論)の後に置いた。

②の神学教理の構築の作業としては、他にもいくつものテーマについての神学文書を書き残した。初期のものでは『主の聖餐に関する小品』、『聖遺物考』、後に『神の永遠の予定』、『聖餐の教理』などがある。

(4) いずれにせよ、② 神学教理 (*doctrina=credo*) を構築する作業は、① 聖書講解 (*lectio=canon*) を行う中で、新しい知見を得るたびに、『綱要』の適切な個所に追加するという作業を随時行った。

⁵ これは後述するが、アウグスティヌス以来、長らく中世で使われた書物の読解の方法であり、ある意味、現代に忘れられた取り組みでもある。書物の字句を丁寧に読み進める方法は「読解 *lectio*」と呼び、他方、「*dialogus*」、「*disputatio*」などに用いられる大意を掴んだり、論争に用いる方法を「要綱 *doctrina*」とした。歴史的な由来は別の機会に論じたい。

カルヴァンは、このように、「聖書」を土台に、① 聖書講解 (*lectio=canon*) と ② 神学教理 (*doctrina=credo*) を車の両輪のように同時に進行させながら生涯活動が続けたが、これには次のような原則に従った。① 聖書講解 (*lectio=canon*) の作業では、「神学教理」が解釈する上で、「軸」であり、かつ「枠」としての役割を果たした。② 神学教理 (*doctrina=credo*) の作業では、毎日の ① 聖書講解 (*lectio=canon*) の作業によって得られた新しい知見 (実例や証言) が教理を保証する聖書の引用文として用いられた (『綱要』の「梗概」を参照のこと)。

(5) さらに特筆すべきは、カルヴァンは生涯を通して、一度も、② の神学教理 (*doctrina*) を説教したことがなかった。子供のカテキズムを教えるのに、説教の形式をもって行ったことはあるが、教理は説教するものではなかった。これはよく注意を払うべき点である。つまり説教は、教理を教えることを目的とするものではなかった。説教については後述するが、もっと違う効果を狙った。すなわち信仰的、霊的養いである。

2 教会の建徳 (*edificatio*) を目指して

カルヴァンの生涯に亘る神学的な働きは、① 聖書講解 (*lectio=canon*)、すなわち「聖書解釈の活動」と、② 神学教理 (*doctrina=credo*)、つまり「神学的著述活動」の、二つの領域に大別され、両者を同時に並行して進めたが、この両者共に、その執筆の動機は一つであった。すなわち、教理的著述の代表作である『キリスト教綱要』と聖書の各書の『聖書注解』(と説教)の両者が、「教会の建徳 (*edificatio*) のために」、つまり聖書が告げる神の教会を地上に建てるために、③ 教会の建徳 (*edificatio=ordo*) に役立つ、「真実の教会を建てるために益する」ように、という願いからであった。以下に概略を述べる。

(1) カルヴァンの ① 聖書講解 (*lectio=canon*)、すなわち「聖書解釈の活動」は、最終的な目標を「教会の建徳のために」に据えられた。これは『キリスト教綱要』の執筆目標と同じである。カルヴァンは、常にこの大きな目標を目指して、聖書の語句を解釈し、また「教会の建徳」を基準にして釈義を重点的に施すか否かの取捨選択を行った。すなわち、カルヴァンにとっては、聖書釈義によって生み出される結果が、常に「教会の建徳 (*ecclesia edificatio / l'edification de l'église*) に役立つ」かどうかという点に判断基準があった。この視点に立つからこそ、長々と記述することや、議論を複雑にして煙に巻くこと、思弁をもてあそぶこと、自身や他者の名を高めることを徹底的に避けることが出来た。

(2) 続いて、② 神学教理 (*doctrina=credo*) の活動の目標も明確である。1536年の『キリスト教綱要』(初版)には付されていないが、1539年の第2版以後は「ジャン・カルヴァンより読者へ」が巻頭に置かれ、その中で初版の出版に関して、やや控えめに、「私

としては、主の教会にいくらかでも益すると思える時に公刊されたのなら、時に適っていると思います」と語り、『綱要』が思いの外「主の教会に益すること」が出来たことを述べている。1559年のラテン語最終版では、この言葉に続けて、「そのことが私のただ一つの願いでした」と念を押している。20年間絶えず心掛けた点であった。

なお、最終版では、「神の教会のために」という言葉を文中でさらに2回用いている。曰く、「実際、神の教会に役立つものにしようと考えて、私がこの著作にどれほどの努力を傾けたかは、隠れもない証拠を示してもよいのです」と、カルヴァン自身、公にしなかった努力について触れている。また数行後に、「教会の教師としての職務を受けて以来、混じり気なき敬虔の教理の擁護を通じて教会のために尽くす以外の何も企てなかったことについて、私の良心は神と御使いたちを証人としています」と、自身の働きについて語っている。

この「教会に役立つ」ため、ないしは、「教会の建徳のために」という大きな目標は、カルヴァンの最初の聖書注解である、『ローマ書注解』で明言されている。「序」において、自分が注解書を執筆するのは「神の教会に何らかの益をもたらす」ことを抑えられなかったからであると言う。また続けて、この仕事に着手する目的が、「教会の公共の益を目指す以外のいかなる理由にもよらない」と語る。

「教会の建徳のために」という大きな目的は、他の聖書注解においても繰り返される。『使徒言行録注解』（1552年）の「序文」において、「とにかく、この私の努力は教会全体に共通する有用なものとなるよう願っております」と語っている。『共観福音書注解』（1555年）においても同じである。『詩編注解』（1557）の「序」において、その最後に「私は教会の徳を高めるに役立ちたいという以外には、推頌の理由をもたない」とある⁶。

以上のように、カルヴァンにとって、『綱要』の執筆も『聖書注解』の出版も、「教会の建徳」という大きな目標に向けて進められたのであり、これはカルヴァンが初期の著作で好んで用いた用語、「良く整えられた教会 (*Église bien ordonnée*)」というフレーズと同じである⁷。

こうして、カルヴァン自身がジュネーヴにおいて「真の神の教会の建設のために」と願っ

⁶ アレキサンダー・ガノッチーは、カルヴァンの聖書解釈が当時、教会に生じるキリスト教の過ちを正すという二次的な目的をもったが、第一次的な最終目標は、「教会の徳を高める」ことにあったと語る。Alexandre Ganoczy und Stefan Scheld, *Die Hermeneutik Calvins* (Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1983), ss. 108-109.

⁷ 拙稿を参照: Shin Nomura, *Église bien ordonnée: Liturgical and Spiritual Aspects of Calvin's Concept of the Worship in Calvin*, in *Asian Churches*, vol. 3 (Korea Calvin Society, 2009).

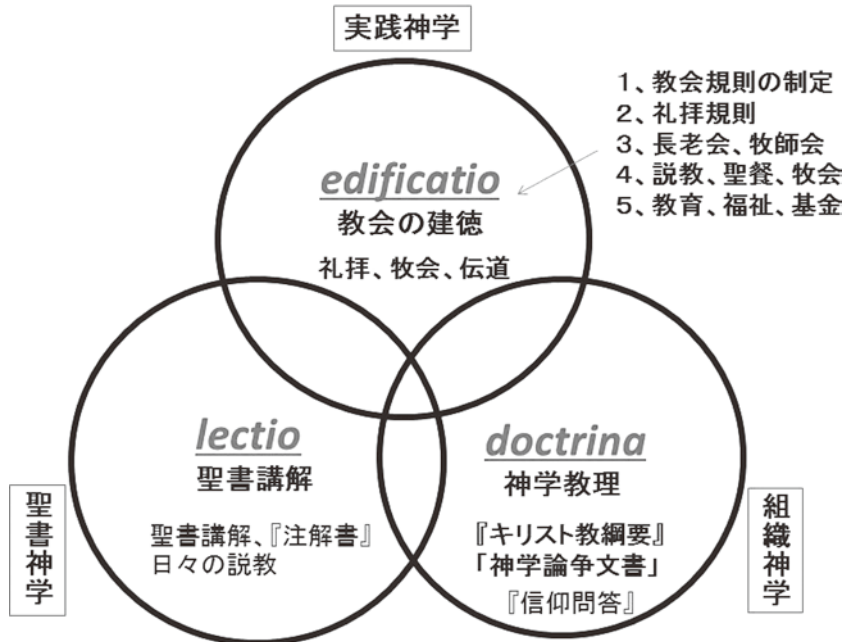
て、行った活動は、図らずも、「聖書 (*canon*)」、「信条 (*credo*)」、「制度 (*ordo*)」の関係を申し分なく調和させていたことを明らかにする。すなわち、教会を建てる三本の柱の中の二つの要素、*canon*、*credo*が、いずれもより良き *ordo* を構築しようと、方向付けられている。キリストの教えがこの世界に広がる上で不可欠な三本の基本的支柱は、いずれを欠かしてもキリスト教は成り立たないのであるから、この三つの柱を据える基礎的な努力にカルヴァンは生涯を捧げたと言えるだろう。

なお、この三つの柱は、今日で言えば神学の三専門分野、すなわち、「聖書神学」、「教義学（と歴史神学）」、「実践神学」という区分に等しい。すなわち、最初に触れたように、カルヴァンはこの三つをまんべんなく一人で行ったのである。

よって、カルヴァンは、聖書を土台にして神学の三つの分野を常に意識し、神学活動を続けた。すなわち ① 聖書講解 (*lectio=canon*)、② 神学教理 (*doctrina=credo*)、③ 教会の建徳 (*edificatio=ordo*) である。これが、カルヴァンが「*sola scriptura* 聖書のみ」、「聖書という宝」から教会における必要なものを余すことなく学び取る作業であった。

カルヴァンの生涯の活動分野についての見取り図

(政治や経済、フランスとの関わりは除く)



〔II〕 聖書講解…独特な取り組み

最初に触れておくべき点は、「聖書から教理体系を構築する作業」、すなわち、本稿で語る「神学教理 (*doctrina*)」の領域は、神学そのものの要点であり、神学の精髓を意味する。それは、聖書の解釈に対して、すなわち、「聖書講解 (*lectio*)」にとっては、解釈の基軸となり、解釈が偏らないための枠となる。それゆえ、神学教理は、総じて教会の神学思想の柱であり、屋台骨である。

一方、「聖書からメッセージを得る作業」、すなわち「聖書講解 (*lectio*)」は、聖書の一字一句に秘められている神の恵みを掘り起こす作業である。その際に「神学教理」を大いに援用しつつ、著者の意図を探り、この「掘り出し作業」を行う。掘り起こしたメッセージが今日の人々の心を打ち、説得的であるなら、それは聖霊の働きによるのであり、人間の常識や判断では説明できない。なぜなら、過ぎ去った過去の出来事が「現在的である」なら、それは人間の常識や力を越えた領域の事柄に属するからである。いずれにせよ、この作業は解釈者が霊的に豊かに満たされる時であり、同時に読者(聴衆)に共感と感動を生じさせる。

本稿で強調したい点は、この「聖書講解 (*lectio*)」という作業であり、聖書(という宝)から豊かな恵みを得るといふ喜び、霊的に満たされて外に向かうという、信仰者にとっての基本的な取り組みが回復されるべきであるという点にある。少なくとも、これがカルヴァンの聖書注解とその実践的な説教の醍醐味であり、我々が最も回復しなければならない領域であると筆者は考える。

1 その工夫

カルヴァンは①「聖書講解 (*lectio*)」と②「神学教理 (*doctrina*)」の作業を行う場合、両者を混同しないために、ある種の工夫を施した。これは現時点では立証されていないが、ある工夫、何らかの技法をもって聖書解釈に取り組まなければ、作業に一貫性を保てないはずである。カルヴァンは、教会の礼拝において講壇に登る時に説教の原稿やメモすら持っていなかったと言われる。そのためには、何か独特の工夫や原則を身に着けていなければ一貫性を保てない。分かり易い方針、パターンが必要である。すなわち、聖書注解を行う場合や説教するという「聖書講解 (*lectio*)」を行う場合には、文章を丁寧に、しかも同じテンポで読み進めるために、あたかも聖書を横から読むかのように文字列に沿って順に読み進めた。

これは後述するが、カルヴァンは「聖書釈義は著者の意図を探る」としたが、この作業

を行うためには、著者が執筆したように解釈者も読み進めることが肝要なのである。だからこそ、カルヴァンは一度たりとも説教や解釈の作業において、解釈中の聖書の一書を途中で中断したことはない。説教にしろ聖書注解にせよ、「聖書講解 (*lectio*)」を実践する場合には、最初の文字や句から（時に当該聖書の題名から）説き明かした。しかもその書の最後の言葉や、挨拶まで説き明さなければ解釈は終了しなかった。カルヴァンの説教や注解書を読むと、最初から最後まで全部解釈し、説教を行っているが、これは一見、規則正しい、律儀で厳格なカルヴァンの性格から来ているという印象を受ける。しかしそれは全く違う。カルヴァンの聖書解釈の取り組み方に特色があり、その結果、概してそのような印象を人々に与えるに過ぎない⁸。この読み方を筆者は、「水平読み *Horizontal Reading*」と呼んでいる。巻物の書物を読むときには、このような読み方となる。

これに対して、聖書から一つの教理を抽出して他の教理と照らし合わせ、神学の教理体系を構築する作業、すなわち ②「神学教理 (*doctrina*)」の領域では、カルヴァンは普通に聖書を読んだ。すなわち、聖書を正面に据えて読めば、紙面全体を見渡すことが出来、ただちに眼前の聖書の内容の要旨を掴むことができる。こうして、必要な情報を集めて神学教理の体系を構築できたのである。この読み方を筆者は、「垂直読み *Vertical Reading*」と呼ぶ。実際、今日万人が書物を読む時の読み方である。

要するに、どれほどの力量の解釈者や説教者であろうと、誰一人として、メモなく、原稿なく、ただひたすらに原典を見据えて解釈し、説教するなら、特別な工夫か心掛けがなければ長続きはしないし、良い説教をすることも出来ない。しかし、このような工夫や技法をもてば、ブレず、脱線せず、一貫して、最初から最後まで解釈し、語り続けることが可能である。

2 聖書解釈の手順

カルヴァンが聖書を解釈し注解書を執筆する場合においても、講壇で説教をする時にも、その手法は、きわめて単純なスタイルをもっている。すなわち、当該聖書箇所「文字や句」(①)をじっくりと見据えながら（あかたも横から読むごとく）、その言葉を書き記した「著者の意図」(②)を推し量る。眼前にある文字は、聖書の著者や編集者たちが、貴重な紙面に（パピルスや羊皮紙などに）、必要最小限の言葉を用いて、巨大な世界を書き

⁸ ジュネーヴから追放され、復帰した時の話は有名である。復帰後の最初の説教で、カルヴァンが何を語るのか、会衆がかたずをのんで見守る中、カルヴァンは追放された時に終わった聖書の箇所の続きから説教を始めた。それは何事もなかったかのようにいつも通りの説教であった。カルヴァンにとっては、読み始めた聖書の一書は、順に読み進めなければならなかっただけの話である。T. H. L. Parker, *Calvin's Preaching* (Scotland: T&T Clark, 1992), p. 59.

留めた作品なのである。新約聖書の著者たちは、旧約聖書のヘブライ語の使用には熟達していただろうが、新約聖書のギリシア語に関しては未熟な者たちもいた。

実際、紀元前4世紀のプラトンやアリストテレスらギリシア哲学者の見事な文章に比べれば、私たちが眼にしている聖書にはかなり稚拙な文章があることは否めない⁹。文章の執筆に関しては、仲間が手伝っただろうし、後に修正されたり、加筆された部分もありかもしれない。しかし、ルカが自分の福音書の冒頭で多くの人々が書き始めていると語っているように、主イエス・キリストの生涯を書き留める作業はここかしこで着手されていた。おそらく執筆された文章の中には著者のバイアスのかかった文章もあっただろうが、原則的には出来るだけ生じた出来事を冷静に書き留める努力はしただろう。その中でも、時が経つに連れて、より信憑性の高い、大勢のキリスト者たちが認め得る文章が残った。395年のカルタゴ会議で現在の聖書の構成が最終確定した。

「著者の意図を尋ねる」というより、「聖書の編者たちの意図を尋ねる」という表現が良いかもしれない。しかし、何よりも著者や編者たちが体験し、見聞きした世界は途方もなく大きく感動と喜びに満ちていたことは確かだ。それを現代の読み手(解釈者)は、掘り起こす、ないしは追想する。カルヴァンは聖書を、著者が神の導きの下で書いたことを前提に解釈する。この解釈は、既述したように、後世の聖書解釈者が神の霊を再び受ける取り組みであり、著者の意図を掘り起こし、それが現代の人々の心に届き、感動を与える時に、解釈者とその読み手は聖書の著者を動かした聖霊の働きを通し、再び聖霊の豊かな働きに浴す。

カルヴァンは、著者の意図を尋ねたのち、直ちに、これを根拠に会衆に向けて「適応」(③)、すなわち奨励した。ここでは、著者の声をパラフレーズしたり、他の聖書箇所を引用したり、また福音やキリストと関連させたり、時には身近な例を挙げて解説をし、16世紀ジュネーヴの会衆にふさわしく語る。これが、本稿の序で触れたカルヴァンの説教が決して逐語霊感で終わらず、聖書根本主義にも陥らないという理由なのである。この部分を語り終えると、カルヴァンは次の語句に向かって、同じように①、②、③の順序で読み進める。いわゆる、起承転結という文章構造はない。序(導入)に続いて、①、②、③、①、②、③、の繰り返しで注解書も説教も説き明かされる。説教の場合には、最後に「以上がこの聖書箇所から私たちが学びとれることです。以下は次回といたします」¹⁰などと語って、一時

⁹ マタイは「見よ (ιδού)」を多用し、マルコは「そして (καί)」と「ただちに (εὐθύς)」を頻繁に用い、ぎこちない。

¹⁰ Voilà donc en somme ce que nous avons à observer de ce passage, iusques à ce que le reste s'ensuyve. 『命の登録台帳』エフェソ書第1章(上) アジア・カルヴァン学会編、キリスト新聞社、2006年、158頁。

間の説き明かしを終える。

3 カルヴァンの証言

カルヴァンの聖書解釈の方法は、講義においても、聖書注解でも、説教においても、みな同じパターンを踏んでおり、明確である¹¹。すなわち、「聖書の著者の意図を簡潔・明晰に説き明かす」という手法である。技法としては単純であるが、深い意味と有用性も持っている。何よりもカルヴァンが、これが最上の方法であると宣言し、しかもこの方法を生涯に亘って一貫して用い、聖書を全巻解釈しようとしたのだからその実用性も持続性も際立っている。実際このことは解説しようとする多くの紙面を要するが、現代において実践しても、実に取り組み易く、効果的であることが判明する。

しかし、できるだけこのことを端的に解説するために、最初に確認しておくべき点は、カルヴァンの語った自身の聖書解釈の方針についての証言である。1540年に出版した『ローマ書注解』の冒頭に付された「シモン・グリネウス宛ての序文」に、自身の聖書釈義の方法と理念を表明している。

私たちが聖書注解の最善の方法について親しく語りあったのは、3年前であったと記憶しています。その時、あなたが最も好まれた方法は、私にとっても当時、他にまさって良いものでした。すなわち私たち二人とも、聖書注解者の力量は、とりわけ「明瞭な簡潔さ *perspicua brevitatis*」の中にあると考えたのです。確かに、注解者の職務は、ただ一つ、解き明かそうと企てている〔書物の〕著者の意図を明らかにすることにあります。そこから読者たちを遠ざければ遠ざけるほど、〔注解者は〕自分の目的から逸脱し、少なくとも自分の限界を越えることとなります。従って、私たちは、今日、神学を促進しようと労する多くの人々の中から、〔事柄を〕「明晰 *facilitas*」にしようと努め、同時に冗長なる注解によって読者たちを過度に煩わさないように努める人が登場することを望んできました¹²。

この序文は、ギリシア古典語の大家であったシモン・グリネウスへの献呈の辞である。カルヴァンは、ここで最良の「注解の方法」を語り、グリネウスと3年前に、話し合っ

¹¹ 拙論を参照、「聖書解釈と説教」(『新たな一步を』アジア・カルヴァン学会日本支部編、キリスト新聞社2009年、42頁)。

¹² *Commentarius in Epistolam Pauli ad Romanos, Ioannis Calvinus Opera Exegetica, vol XIII, ed. T. H. L. Parker and D. C. Parker (Genève: Droz, 1999), p. 3 (私訳)*。[] は分かり易くするために筆者が補った。

確認した方法論であったと記す。すなわち、「聖書の著者の意図を明らかにする」ということである。しかも、カルヴァンは、この著名な古典学者と会う前からこの方法論を知っていた¹³。

4 聖書の著者の意図を明らかにする

カルヴァンは、聖書を解釈する前に、ストア派の賢人セネカの執筆した『寛容論』を詳細に検討し、解説を付して、『セネカ寛容論注解』を出版した。若干23歳であった。この書を注解するにあたってカルヴァンの採った方法は、記述された文章の順序に従って、丹念に語句を解説するという、その後のカルヴァンが自身の聖書注解にほどこした方法と大差がない。当時から、カルヴァンは「人間の執筆した文章」をどのように解釈するかを自分なりに身につけていた。

実際、種々の聖書解釈論がある中で、聖書の「様々な人々の執筆した文章」を収集した書物という性格を重視すれば、「様々な人々の執筆した文章」を注解することの最も確かで、説得力のある解釈方法は、それぞれの書を執筆した著者自身が解説してくれることである。著者本人が自分の書いた文章を解説することほど分かりやすく、的を射た解説はない。しかし、著者ははるか昔の故人である。そこで、後世の人は、いかに著者の意図(心)に肉薄できるかが問われる。「著者の意図に出来るだけ近づこうとする」こと、これが様々な人々の文章を「注解するという作業」の最も大事な役割であろう。

なるほど聖書という書物の注解方法は多様にある。どれも一理あるし、カルヴァンが言うように、他人の解釈方法を咎めることは誰にも出来ない。しかし、聖書という書物が一般の書物と性格が異なるのは、各書を執筆した著者に加え、その著者に働きかけた「神という真の著者」があるという点である。ここに聖書を単なる古典と見て、解釈して終わらせない特殊性がある。

そこで注目すべきことは、一般の書物を解釈する場合はその書物と著者に集中すればいいが、聖書を注解する場合には、それに加えて「神という真の著者」を意識し、真の著者の意志を明らかにするという大切な任務を有する。

その場合、目の前に広がる文字列を解説し、注解をほどこせても、真の主人公なる神の意志を忘れることなく、誤ることなく伝え得るかということ、これは難しい。なるほど様々な例話やイラスト、あるいは視点や方法によって聖書を解説出来たととしても、聖書の解釈

¹³ これは、アリストテレスの理解であり、アウグスティヌスを経て中世では周知のことであったが、近世になると弱くなり、ほとんど消えたといえる。参照：『カルヴァン研究』「ものとするし」創刊号、日本カルヴァン研究会学会誌、株式会社ヨベル、2018年)、5-6頁他。

という特殊な任務に出来るだけ忠実であろうとするなら、結局、聖書の著者たちの意図、ないしは彼らの心に肉薄することが、その著者を生かした「真の著者」の意図（究極には聖霊の意図）を明らかにする最善の道となる。

カルヴァンは、新約聖書の他の注解書の梗概でも、同じように著者の意図について触れるが、『創世記注解』の「梗概」において聖霊との関係で次のように語る。

今や私は、モーセの意図、いやむしろ彼の口を通して語りたもうた聖霊の意図に立ち返る。

ここにカルヴァンが創世記の著者であるモーセの意図を探ることによって、「彼の口を通して語りたもうた聖霊の意図」に近づこうと努めている様子を伺い知る。解釈者は、聖書の著者の意図に接近する時、著者を生かした聖霊の働きに再びあずかる可能性を得る。カルヴァンは、これについて『綱要』で、次のように言う（1.9.2 渡辺信夫訳）。

聖霊が我々の内に入りたもうただけで十分であるが、聖霊の名を名乗ってサタンの霊が忍び込むことがないように、聖霊は聖書に刻まれたその御姿によって我々に認識せられることを欲したものである。彼こそが聖書の諸々の著者であられる。彼は変化することも、違ったものになることも不可能である。それ故に、一たびそこにおいて御自身を現したもうたままに、いつまでも留まりたもうのが当然である。

神は昨日も今日も明日も、そして永久に変わることがないように¹⁴、あの時代に人々を生かした聖霊の働きは、今日同じ信仰をもつ解釈者が聖書の著者の意図を尋ねる時、再び現代の解釈者の内にその働きを開始される。我々は、何よりも聖書から聖霊の働きを求めように促されている。曰く、「聖霊は聖書に刻まれたその御姿によって我々に認識せられることを欲したものである」と。

次の言葉は、「著者」という言葉は使われていないが、聖書に内在する真理の探求、再現が、結局、再び聖霊の働き、力にあずかる道であると言われている。

聖霊は聖書の中に示された御自身の真理と固く結び付いておられるので、御言葉が相

¹⁴ ヘブライ 13: 8 「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」。

応しい尊厳と威厳を帰せられる場合にこそ、その力を示したもうということである (1.9.3 同訳)。

つまり、聖書の中には神(聖霊)の真理が横たわっているので、謙虚になって、記されたところをそのまま受け取る時、すなわち聖書の本文をそのように書かした著者の意図と心を探求する時、解釈者は、神(聖霊)の真理に極力近づくことになり、このとこころで、再び聖霊なる神の力に与る可能性をもつ。

5 聖霊に満たされて出発

「カルヴァンは聖霊の神学者である」とは一昔前にカルヴァン研究者たちの中で論じられたテーマである。しかし、どのようにして聖霊を受けるのか、どうすれば聖霊によって人は押し出されるのかについては、「信仰深さで」、「謙虚な姿勢で」など、さらに「神学研究をする」ことでより強められるという認識が広がっていた。もちろん聖書と聖霊が不可分であることはみな承知していた。しかも、カルヴァンのように連続講解説教を行う説教者も多かった。しかし筆者の考えでは、結局十分な効果が得られなかったのではないかと思われる。その理由はいくつかあるとしても、少なくとも、カルヴァンのような聖書解釈を続けている人は、まことに少なく、そのこつを掴んでいる人も少ない。特に主題的講解説教をする人が多いが、これはカルヴァンの取り組みとは異なる。主題的講解説教は、語る説教者の信仰と力量が全面的に要求されるが、カルヴァンの講解説教は、説教者が聖書テキストの背後に退き、二次的な位置に置かれ、その一次的な権威を著者におき、さらにその著者を生かした神が全面的に現れ出る。ここにカルヴァンの謙虚さがあり、カルヴァンの「自分を語らない」という姿勢を生涯貫いた理由がある¹⁵。

さらに先に触れたが、カルヴァンの聖書解釈論について学ぶ人々の中には、「聖書に固執し、古代の、小さな世界に押し込められる」という印象をもつ人がいると指摘したが、これは全くの誤解である。キリストの弟子たちが見聞きした世界はこの世界を超えた巨大な、壮大な世界であった。それを掘り起こすには、今日の我々の想像力の弱さ、小ささを嘆かなければならない。カルヴァンが「聖書は宝である」と言ったのは、カルヴァンがこの壮大な世界に気付き、神の宝の力と喜びに与っていたのであり、彼にとっては、聖書の執筆された世界をいかに鮮明に豊かに掘り起こし、16世紀の人々に再び感動をもって語るか、にかかっていたのである。

¹⁵ リチャード・ムラーもハイコ・オーバーマンも、これを適切に説明できていない。

〔III〕 *sola scripture* のもつプロテスタント教会の意義

カルヴァンの神学を論じるなら、彼を育てた社会と伝統、特に神学的ルーツを探ることは必須である。今日の我々が、ルターもカルヴァンもさらにバルトや多くの神学者について学んで教会形成と福音宣教に励んでいるのと同様に、カルヴァンも古代、中世世界から多くを学んだ。いや人文主義者を目指していた若き日には、さらに遡ってギリシア世界のプラトン、アリストテレスを学び、ラテン世界のキケロ、ウェルギリウス、セネカなどを熟知していた。ハイコ・オーバーマンも生前にそれを強調し、ルターやカルヴァンを学ぶ場合に、古代、中世神学を深く研究する必要性を指摘していた。

この紙面でカルヴァンの思想形成におけるこのルーツを概観することはできないが、少なくともカルヴァンに最も影響のあった人物は、アウグスティヌス（354-430）であった。特にアウグスティヌスの聖書解釈論である『キリスト教の教え *De doctrina christiana*』と『教師論 *De magistro*』は必読の書である。そこで、これに触れておかないと、*sola scripture* のもつ深い意義を語ることにならない。

1 アウグスティヌスとカルヴァンの聖書解釈論¹⁶

アウグスティヌスの聖書解釈論は、「もの *res*」と「しるし *signum*」という記号論的範疇で解説することができる。カルヴァン自身が自分の著作の中で「もの」と「しるし」というアウグスティヌスの議論に直接言及している箇所は見受けられないが、カルヴァンの神学においては、アウグスティヌスの「もの・しるし」理解が濃厚である。その一つとして、久米あつみ氏が、「ものとしるしーカルヴァンの聖餐論において」を学会で発表し、「もの」がキリスト（の肉と血）を指し、「しるし」とはパンと葡萄酒であるとして論じ、それに関連するカルヴァンの文章を引用して解説を行った¹⁷。カルヴァンの聖餐論は、表現や語彙が活動の初期から晩年にかけて少しずつ変化したが、内容的に大きく変わったわけではない。

2009年にアジア・カルヴァン学会日本支部で出版した『新たな一步を』においては、ヴィム・ヤンセの論文「カルヴァンの聖餐論」を翻訳して掲載したが、この論文の最後の「総合的まとめ」の中で、ヤンセ教授はカルヴァンの聖餐論の10の特色を挙げている。その最初は次の指摘である。

¹⁶ 以下の論考は、拙稿「アウグスティヌスからカルヴァンへ」『季刊教会』（101号、2015年）を参照。既出『カルヴァン研究』も参照。

¹⁷ アジア・カルヴァン学会・日本カルヴァン研究会合同シンポジウム2016年発表。前掲書『ものとしるし』を参照のこと。

カルヴァンの思想の根幹にあるのは、アウグスティヌスの思想から受け継がれた二元的理解であり、外面と内面、しるしとそれが示す実体、可視的と不可視的、知覚される認識と知覚される心、肉的和霊的、口と心といった対照が挙げられる¹⁸。

これを見て確認できるが、カルヴァンの聖餐論が、アウグスティヌスの「もの・しるし」論を踏襲していることが明確に指摘されている。そして、カルヴァンの聖書解釈論においても然りである。すなわち、アウグスティヌスが聖書解釈論において、聖書テキストを「しるし *signum*」と見、この「しるし」から「もの *res*」、すなわち内容を掘り起こす、発見することが聖書解釈の原則であると論じていることから、カルヴァンの聖書解釈もまた聖書テキスト（しるし）からメッセージ（もの）を捉える取り組みであった。ただし、カルヴァンは、アウグスティヌスが多様に語っている中で、特に、「しるし」を書いた「著者」に焦点を絞り、「もの」については「著者の意図」を一貫して問うことに徹し、さらに著者に執筆させた神を見つめ、神の御心を問うという点で、ある意味でアウグスティヌスの聖書解釈論を自身の「聖書講解」の作業において徹底的に実践したと言っても良い。

少なくともこの聖書解釈の原則はカルヴァンの時代までは主流を占めていた。しかし現代なぜこれが希薄になったのか、ないしは古典的解釈方法としてあまり顧みられなくなったのかという問いが生じる。この問いに対しては、十分に答える根拠がある。短く触れておくと、「キリスト論的集中」とか、「教理的枠」をもって解釈するというあらかじめ解釈者の側に伝えたいメッセージや意図があって、聖書を解釈するという立場が今日世界の主流を占めているからだと言える。さらに、解釈者（や説教者）が聖書の御言葉を前にして、自分を謙らせ（*self-emptiness*）て、自分（の体験や例話）を語らずに、聖書そのものを語るという姿勢が希薄になったからである。聖書をこのように解釈する立場は、汲めど尽きない豊かな聖書のメッセージを掘り起こすという作業とは対極にある。なぜなら解釈者（説教者）自身がすでに語りたことを幾つももっているからだ。しかし解釈者よりも聖書執筆者は、はるかに語りたメッセージもっている。それを回復し、それを前面に押し出さなければならない。現代もう一度、古くて、しかし力に満ちたこの聖書解釈の手法が回復されることが求められる¹⁹。

¹⁸ 『新たな一歩を』、93頁。

¹⁹ ポール・リクールら現代の解釈論者たちは、一端テキストが生まれるとそれを執筆した著者の意図は問えないという立場を主張し、特に聖書の解釈にこれを適用するが、筆者はこれについては反対である。詳細は別の機会に譲る。

2 「聖書のアイコン読み」(アイコンとしての聖書)

アウグスティヌスもカルヴァンも結局、聖書の言葉を「しるし(記号)」とみた。それと同時に、両者とも聖餐も「しるし」として捉えた。これは、今後の神学研究にとって大変重要な点である。

結論を簡潔に表現すれば、正教会には「アイコン」があり、カトリック教会には「聖像やロザリオ」がある。そして、プロテスタントには「聖書」があるということなのである。ルターが「聖書のみ *sola scriptura*」と語った言葉は、カルヴァンにおいては徹底した。カルヴァンは、正教会における「アイコン」の役割が、またローマ・カトリック教会における「聖像やロザリオ」という役割が、「聖書のみ」で可能であるとした人物だということである。

カルヴァンは毎朝、原典聖書を見つめる。教会の講壇で、多くの会衆と共に、その日の聖書の言葉に集中する。それは文字に集中する作業であるが、これは「しるし」であり、「記号」なのである。記号(文字)の向こうに執筆した著者と真の執筆者なる神を深く思いめぐらす。それは「アイコン」と同じ構造をもっている。「アイコン」は、真の神の姿を観る「しるし」であると説明される。しるしを通して原像を観想する。カルヴァンは、文字を通して初代のキリストの弟子たちの躍動する姿を見る。パウロが懸命にエフェソの人々を心に留め、気遣い、福音にある生き方を勧める姿が髣髴する。旧約聖書のヘブライ語ならば、モーセがいやがる民衆を無理にでも引き立てて故郷カナンに帰還する姿が浮かぶ。イザヤが失意の民に懸命に慰めを語り、未来を見よと励ます姿が躍動する。これを筆者は「聖書のアイコン読み」と呼ぶ。

今日、正教会では、各家庭に10個近くのアイコンを飾り、彼らはこのアイコンに描かれる母マリアと抱かれる幼子主イエスを通して原型を観想(*contemplatio*)する²⁰。今も正教会の人々は、このアイコンを捨てられない。あくまでも図像(聖画像)であり、アイコンそのものを拝んでいるのではないとする。その向こうに見える原像を観想する。アイコンは媒介としての機能を有する(『正教要理』、『ロシア正教のアイコン』他)。

ローマ・カトリック教会の人々も同様に、聖母マリアや聖人を崇敬する。崇敬であり、尊崇しており、決して崇拝しているのではない、偶像礼拝とは異なると主張する。マリアや聖人は人々の祈りを神に執り成す。あるいは人々を保護する。病や困窮の時に手助けすると理解する。ロザリオ(十字架の付いた鎖)は、聖母マリアへの祈りの道具として用いる。聖像もロザリオもメダイもいずれも観想に用いる。

²⁰ サン・ヴィクトールのフーゴーによれば、観想は、*cognitio, meditatio, contemplatio* という順に行う。

正教会のイコンに対しても、ローマ・カトリック教会の聖人に対しても、プロテスタントはその使用を承認できない。なぜなら、そのような媒介、手段は、主イエス・キリスト、神の独り子、執り成し手、贖い主なるこのお方を疎かにすることにつながる。さらに偶像礼拝に抵触する恐れを感じさせる。改革者たちはこの点において一致してこの聖なる具象物を退けた。今日の我々においても然りである。

しかし、宗教改革者たちの中でも、特にカルヴァンは、これら具象物に代わって、「聖書」という具象物が「観想 (*contemplatio*)」の機能を果たすことを結果として明らかにした。すなわち、イコンも聖人像も聖なる道具も「観想するための記号」としての役割を果たすが、聖書という記号を観想することが最も豊かに、霊的な力に満ちて、しかも人間の知性と感性に訴えて神の恵みと約束を鮮やかに浮き上がらすと示す。聖書そのものがキリストを証言し、キリストの現臨を私たちに体得させる。ここにプロテスタント教会の「*sola scriptura*」の意義と重要性がある。

これは今まで誰も語ったことのない見解であり、プロテスタント教会の未来の展望を開く可能性を秘めている。先に、「本稿で強調したい点は、この「聖書講解 (*lectio*)」という作業であり、聖書（という宝）から豊かな恵みを得るという喜び、霊的に満たされて外に向かうという、信仰者にとっての基本的な取り組みが回復されるという点にある。少なくとも、これがカルヴァンの聖書注解とその実践的な説教の醍醐味であり、我々が最も回復しなければならない領域であると筆者は考える」と述べた。ローマ・カトリック教会はこれを聖像、聖なる具象物、さらに七つの sacramentum によって得る。正教会はイコン、聖遺物、聖体機密からこれを得る。彼らはこれらの具象物を観想 (*contemplatio*) することにより、霊的な力を得る。ならば、プロテスタント教会は、二つの sacramentum と共に、「聖書を観想 (*contemplatio*) する」ことによって霊的な力を得ると主張したい。カルヴァンがその実践者である。

もし、この視点を明確に確立できると、キリスト教の一致運動（エキュメニズム）が運動体として推進するのみならず、神学的な面で互いを理解し、一致していく展望を切り拓く可能性をもつ。すなわち教理で一致を模索するのではなく（教理でお互いが譲ることはほぼ不可能である）、神の創造による世界の枠組み（万物はしるし〔*signum*〕である）と、神の霊的な力から互いを理解し合おうとする新しい試みである。

そこで次のように語ることで一つのヴィジョン、すなわち教会の一致が提言できるかもしれない。

ecclesia catholica Romana, ecclesia catholica Orthodoxa, ecclesia catholica Protestans

普遍教会 (*ecclesia catholica*) は、まさにキリストの体であり、キリストの下で一つである。しかしそれぞれの教会には主張があり、互いに譲れないことも確かである。しかしそのことは、同時に世界の教会の主イエス・キリストはまことに豊かに御自身を現され、私たちに働きかけてくださるお方である。文化や環境、習慣が異なることで、少しずつ強調点に差異が生まれ、各地の人々が神の恵みを多様に受け止めることは否めない。しかし普遍教会 (*ecclesia catholica*) は一つである。21世紀の普遍教会は、ますます神の霊的な力を受けて、礼拝に伝道に教育に福祉に、そして世界の平和と共生に貢献する働きを大胆に進めていきたい。プロテスタント教会は、再度、宗教改革の三大原則である、「*sola scriptura*」, 「*sola fide*」 「*sola gratia*」のもつ意義と用法を明確に自覚して、自らの独自性を大切にしていきたい。要となる軸が固く、揺らがなければ、多様な広がりを実現し、包括性を高め、一致協力を前進させることへつながる。

(了)